正岡子規　二首

作者

正岡子規

慶応三（一八六七）年～明治三十五（一九〇二）年。歌人・俳人。愛媛県生まれ。本名は常規（つねのり）。幼名は升（のぼる）。獺祭書屋主人（だっさいしょおく）・竹の里人などと号した。七歳の時、母方の祖父で漢学者大原観山に、「升（のぼる）は教えればいくらでも覚えるから楽しみ」と言わしめた。松山中学では弁論部に入り、国会を諷する演説を行い、学校側から注意された。良師に乏しいとして松山中学を中退して上京、翌年の明治十七年、大学予備門（後に第一高等中学校と改称）に入った。翌十八年には政治から哲学に志を決め、郷里の歌人井手真棹（まさお）を訪ね、和歌の指導を受けた。数学で落第したが「自恃」を主張して全ての行動の規範とし、野球やスペンサーの著書に興味を示した。（現在も使われている野球用語〔打者・走者・死球など〕の翻訳を成した功績により、平成十四年、新世紀特別枠で野球殿堂入りしている。）二十三年九月、東京帝国大学（文科大学）哲学科に入学（翌年、国文科に移った）。二十五年退学、十二月、日本新聞社に入社した。この年の六月より、既に新聞「日本」に「獺祭書屋俳話」を連載し、西洋的な文学概念で俳諧史を見直そうとした。二十八年三月、日清戦争の従軍記者として金州に派遣され、その帰途船中にて喀血し療養。八月帰郷し、松山中学に勤務していた夏目漱石の下宿に入り、句会を盛んに催した。その秋の旅で腰痛を覚え、次第に歩行が困難になった。二十九年三月、脊椎カリエスと診断され、歩行の自由を失い、病床に臥することが多くなった。しかし創作欲はすこぶる盛んで、この年の作句数は三〇三八句に達した。三十一年、「歌よみに与ふる書」を発表、前年より発行に協力していた雑誌「ホトトギス」を松山より東京に移した。三十二年、いわゆる根岸短歌会が始まり、ほとんど月例歌会となった。その歌会の報告文を新聞「日本」に載せた。病苦と戦いながら、三十四年「墨汁一滴」を、三十五年「病床六尺」「仰臥漫録」などを執筆し、九月十八日、絶筆三句を詠んで、翌日永眠した。

作者を解くカギ

明治三十一年、新聞「日本」に「歌よみに与ふる書」を発表して和歌革新運動の先端を切った。ただごと歌であると桂園派の旧派歌人と「古今集」を批判し、源実朝と「万葉集」とを高く評価して「写生」によって歌を詠むべきことを主張した。

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春雨のふる

〔大意〕　薔薇の新しい紅色の芽が二尺（約六十センチ）ほど伸びて、そこになんと柔らかく細かな春雨が降り注いでいることだ。

指導上の注意点

●二六八ページ・2行

問　**「の」の連続はどのような効果を生んでいるか。**

答　薔薇の新しい花芽のしなやかな伸び方と、しとしと柔らかく降り続く春雨の連続性を思わせている。

補　「くれなゐ」が薔薇の花の色を示すとは限らないことに留意させる。「語句の研究」参照。

語句の研究

●二六八ページ・2行

くれなゐの　仮名遣いに留意。紅色。

二尺　一尺は約三十センチ。六十センチ程伸びている。

たる　存続の助動詞「たり」の連体形「たる」。

キー・ポイント　**薔薇の芽の**　つぼみをつける新芽（シュート）は茎も葉も赤い。薔薇の株は春先から新しい枝を伸ばし、その先に花芽をつける。初句の格助詞「の」につらなる「の」の連続は、新芽の伸びやかさを表現する工夫。

針やはらかに　「針」は、薔薇のとげ。新芽の枝ではまだ柔らかく、細い。

春雨のふる　春雨は若葉・新芽の頃に降る細かい雨。俳句ならば春の季語だが、ここでは実景の写生。結句でも格助詞「の」が重ねられ、新芽をはぐくむ春雨の降り続く様も示す。

鑑賞

「竹乃里歌」所収。明治三十三年の作。庭に植えられた薔薇の濃い緑の葉の茂りから紅色も鮮やかに伸びた花芽をいとおしむように、穏やかな春雨が降り続く。薔薇の新しい芽の先には最初に咲く花のつぼみあり、それが六十センチ程にもなれば咲く日も近い。しなやかな新芽の伸びゆく様を眺める視線を「の」の連続で描き、なめらかに春雨の降りようへと繋ぐ。

作者は脊椎カリエスが進行し、ほぼ寝たきりの病床から見える庭や枕元に届けられる物より他に変化のない時間を送っていた。庭の薔薇の新芽を触れられた頃の感覚――「やはらか」であったことを思い起こしつつ、今は眺めることしかできない薔薇の新芽に格別に鮮やかな生命の発露を感じ、さらに新芽を包むように降りしきる春雨を、恵みの雨と見る。

いちはつの花咲きいでて我目には今年ばかりの春行かんとす

〔**大意**〕いちはつの花が咲きだして、私の目には今年限り（と思われる）春が過ぎて行こうとしてる。

指導上の注意点

●二六八ページ・3行

問「**今年ばかりの春**」**とはどのような意味か。**

答「今年限りの春」の意。季節は毎年巡ってくるものだが、病気を持つ作者には、来年の春が訪れないことを覚悟したもの。「キー・ポイント」参照。

語句の研究

●二六八ページ・3行

いちはつ　アヤメ科の多年草。高さ三十センチメートル、葉は剣状。中央脈が隆起。アヤメ科の中で一番先に咲くため「一初（イチハツ）」の名がある。

春行かんとす　文語調で断定。春が過ぎて行こうとしているという意味。〈いちはつ〉は俳句では夏の季語だが、晩春から咲くので、実質に支えられて「春行かんとす」となった。

キー・ポイント　**我目には今年ばかりの春**

日ごろ剛毅な子規が、無限の哀感せまる思いに死の予感を口にしている点を考えさせる。「我目には」の「は」は、特に提示する意を表す系助詞。「仰臥している自分の目には」の意。「ばかり」は限定する意を表す副助詞。だけ、のみの意。ここでは「今年」を強調している。

この年の秋には、「柿くふも今年ばかりと思ひけり」という句を詠んだ。

「「惜春」の情は、古来和歌のテーマとしてよく詠まれているが、これら一連の歌は、死の前年の作であり、病状もぬきさしならないところに至っていた。それを作者自身よく自覚しており、目に触れるものすべてが悲傷の対象となったのである」（矢羽勝幸「コレクション日本歌人選58正岡子規」平二十四）。

常に客観性を重視し冷静さを示す子規が感情を吐露しているためか、一連の終わりには「心弱くこそ人の見るらめ」とも付け加えて、自らの感傷に対する含羞を示している。「いちはつ」の花の具体的なイメージと一首の哀感を結び付けて鑑賞したい。

鑑賞

明治三十四年作。「しひて筆をとりて」と前書きのある連作十首中の第二首。連作に中には次のような歌もある。

・佐保神の別れかなしも来ん春にふたゝび逢はんわれならなくに
・夕顔の棚つくらんと思へども秋待ちがてぬわれならなくに

いずれも主観を流露したしみじみした歌で、はからいがなく、子規生涯の到達点を示している。連作の底を流れるものは、短い生命の自覚であり、この世に対する哀惜の念である。

与謝野晶子　二首

作者

与謝野晶子

明治十一（一八七八）年～昭和十七（一九四二）年。歌人・詩人。大阪府堺市生まれ。本名は「しょう」（晶）。明治二十七年堺女学校（現、泉陽高校）補習科卒業後、家業（菓子舗駿河屋）の手伝いなどをしながら、王朝の物語などを耽読するとともに新しい文学の思潮にも触れていた。二十九年堺敷島会に入会し、晶子という歌名を用いるようになった。三十一年与謝野鉄幹の歌を「読売新聞」で見て創作意欲が湧いた。三十二年から河井酔茗の組織する浪華青年文学会に参加し、小舟子という筆名で、「よしあし草」に詩歌を発表していた。同じ頃、与謝野鉄幹が中心となって結成した東京新詩社を知り、三十三年四月、「明星」発刊とともにその社友となり、第二号から短歌を発表した。八月西下中の与謝野鉄幹に山川登美子とともに会う。翌三十四年、家を捨て上京し鉄幹と同居。新詩社には多くの文人が集い、晶子も森鷗外、北原白秋、久保田万太郎らの他、女性作家との交流も始まった。八月第一歌集「みだれ髪」を刊行した。秋、鉄幹と結婚。明星派の歌風を代表する存在となった。新詩社では主に女性歌人の指導や選歌を担当し、石川啄木、高村光太郎、佐藤春夫、岡本かの子など次世代の詩人・歌人も多く育てた。大正元年、先に渡欧している鉄幹の後を追い、ヨーロッパに遊び、レニエやロダンらと会った。十年、第二期「明星」創刊、また文化学院の設立に協力して学監となり、芸術による自由教育を唱えて教育界で実践した。昭和十年鉄幹と死別。晩年は脳溢血を患って病床に就き、十七年五月、六十五歳で他界した。

「みだれ髪」は、甘美な青春の空想や自由奔放な情熱などを豊かな言語表現を用いて歌い上げ、封建的な因襲からの解放や恋愛の賛美などを主なテーマとして歌壇以外にも多くの影響を与えた。以後「小扇」（明三十七）などの歌集が刊行されたが、後年は歌壇からは超然として、「源氏物語」の現代語訳など国文学や批評の分野で活躍した。

作者を解くカギ

歌風としては感傷的詠風から出発したが、鉄幹と古典に出会ったことによって、前代までになかった官能的浪漫性を漂わせる歌風に至った。

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

〔大意〕　清水寺へ行こうと祇園の街を過ぎてゆくと桜が咲き誇っている。今夜月の下で行き交っている人々はみな美しい。

指導上の注意点

●二六八ページ・5行

問　**「桜月夜」とはそのような情景か。**

答　桜が咲き誇っている美しい月の夜。

補　晶子の造語と考えられる。六音となるので、字余りの三句切れの句となっている。後に晶子は、「桜月夜」（六音）を「花月夜」（五音）と改めている。比較してどちらが良いか生徒に質問してみるのも一考であろう。定型より字余りの方が豊かさを持つ例である。

語句の研究

●二六八ページ・5行

清水　清水寺のある所で、普段から人の行き交いも多い。京都名産の清水焼もある。

よぎる　過ぎる。祇園の街を過ぎ、夜桜で知られる円山公園を過ぎて、清水寺へ行くコースを散策していると考えられる。

キー・ポイント　**こよひ逢ふ人**　桜月夜に逢う花見の人の群れのこと。「よひ（宵）」は、古く、日没から夜中までの時間帯をいったが、ここでは、夜がそれほど更けていない時間帯で、夜桜見物の人出が多い頃と考えられる。「逢ふ人」が、男か女か、どちらか一方か、両方か、などについても考えさせたい。

鑑賞

「みだれ髪」中「臙脂紫」所収。晶子は「歌のつくりやう」の中でこの歌を自註して「清水寺の方へ行かうとして祇園神社の付近の街を歩いていくと、月は桜に霞んで、行き交ふ人々は男も女も皆美しく感ぜられる夜である」と書いている。うっとりと陶酔するような心情が素直に吐露されている一首で、歌枕といえる〈清水〉や〈祇園〉を舞台として配置し、桜と月をそこに添えて、怪しいまでの美しさを醸し出すことに成功している。すべてを耽美的なまなざしで見て、自分の感情に引き寄せ、〈みなうつくしき〉と浪漫的にくくっている。なお、この情景の中にいる作者もまた、美しい存在として認識されていることは議論を待たないだろう。次に、耽美的な類歌を挙げておく。

・たまくらに鬢のひとすぢきれし音を小琴と聞きし春の夜の夢
・なにとなく君に待たるるここちして出でし花野の夕月夜かな

やは肌のあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君

〔大意〕情熱がたぎった私の柔らかい肌に触れて見もしないで、寂しくはないですか、古い道徳を解くあなた。

指導上の注意点

●二六八ページ・6行

問「さびしからずや」にはどのような心情が読み取れるか。

答「や」は、疑問または反語の助詞として理解する。「寂しくはないですか（寂しいでしょう）」と訴えかける作者の心の在り方から情熱的な生き方への主張が読み取れる。さらに、恋に躊躇する男性に対して、大胆な恋愛を提示し挑発するような気持ちも読み取れる。

語句の研究

●二六八ページ・6行

やは肌　「柔肌」で、柔らかな肌。特に女性の肌をいう。

あつき血潮　「血潮」は、潮（海水）のように体内をめぐる血。「あつき（熱き）」は、体や心が燃えて情熱が沸き立つように感じられる状態をさす。

キー・ポイント　道を説く君　これが誰を指すかということについては、以下のように諸説あり定説を見ない。

(1)古いタイプの道学者（古い道徳を固守して教えようとする者）の意。晶子の自註では、この説を支持し「世の道学者先生」を指すと述べられている。

(2)晶子の歌の指導者でもあり、堺の覚応寺住職である河野鉄南を指すという説。この歌について、晶子が鉄南宛の書簡（明治三十三年十一月八日付に「こののちはよむまじく、ゆるしたまへ」と送っているためである。鉄南は晶子に対して冷たく接したとも言われている。

(3)与謝野鉄幹を指すという説。当時鉄幹には内縁の妻がいた。鉄幹が晶子宛の書簡でその妻に対して「石よりもつめたき人をかき抱き我世むなしく沈むべきかな」という歌を詠んでおり、その直後に「やは肌の」の歌が発表されたためである。時期的な対応から鉄幹説を採る人も多い。

ように、「道を説く君」には諸説あるが、いずれにせよ、女性である晶子がこのように官能的な表現を用いることを厭わず、むしろ、積極的に挑んでいったことは画期的であった。表現せずにはいられない晶子の情熱の高まりがあったことも知られるだろう。時代背景なども考慮しながら鑑賞したい。

鑑賞

『みだれ髪』中「臙脂紫」所収。若い女性が大胆に自身の若さと情熱を誇示して、世俗の古い考え方に立ち尽くす男性に対峙し挑戦するかのような読みぶりである。「キーポイント」に挙げた

若山牧水　二首

作者

若山牧水

明治十八（一八八五）年～昭和三（一九二八）年。歌人。本名は繁（しげる）。宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷に、医師立蔵の長男（末子）として生まれた。延岡中学時代より文学に志し、明治三十七年、上京して早稲田大学文学部高等予科に入学。牧水と号する。三十八年、尾上柴舟の門に入り、前田夕暮らと「車前草社」を結成した。四十一年、大学（英文科）を卒業、第一歌集「海の声」を自費出版する。定職なく生活苦のため、雑誌「創作」（東雲堂の創刊）の編集に従事。四十三年、第二歌集「独り歌へる」刊行。青春の情熱と近代的な哀愁をたたえた浪漫的な作品は、当時の青年層に愛唱された。同年、それまでの二歌集に創作を加えて発表した第三歌集「別離」によって、大いに文名が上がり、歌人としての位置が定まり、前田夕暮（同年歌集「収穫」を上梓）とともに、歌壇に「牧水・夕暮」時代を現出した。四十五年、太田喜志子と結婚。以後、浪漫的歌風から次第に自然主義的な歌風に転じ、現実を凝視した歌集「死か芸術か」（大元）「みなかみ」（大二）などを刊行、自由律的な破調なども多く試みる。大正四年、三浦半島に移住。各地を旅し、人生的な詠風から旅を中心とした自然詠や日常生活詠などが多くなり、自然歌人として、牧水調と言われる清澄平明で流麗な歌風を作り上げていった。九年、静岡県沼津市に移住し、短歌雑誌「創作」の運営や諸雑誌の選歌などに力を注ぐ。富士山を愛し酒に親しみ、昭和二年、北海道や朝鮮半島に旅行したが、その後健康を損ね、三年、沼津の自宅で他界した。平成七年、出身地である宮崎県が若山牧水賞を創設した。

作者を解くカギ

定職に就かず、生涯を歌人として貫き通した。旅や酒を愛する温雅平明の調べを奏でる短歌には、日本人の愛唱歌となったものが少なくない。昭和十三年、遺歌集「黒松」が出版された。他に歌集・歌論書・随筆集・紀行文集などがある。若山牧水の孫にあたる若山聚一氏によって雑誌「創作」は現在も続けられている。

白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずたたよふ

〔**大意**〕白鳥は哀しくないのだろうか。真っ青な空の色にも深いあおみどりの海の色にも染まることなく、真っ白な姿で漂っている。

指導上の注意点

●二六九ページ・２行

問　**「哀しからずや」に込められた思いは、どのようなものか。**

答　「や」は疑問を表す助詞で「哀しくはないのだろうか」の意。自分だったら、心が痛んで泣けてくような哀しい気持ちになるだろうという思いが込められている。

語句の研究

●二六九ページ・２行

あを　「碧」と考えられる。あおみどり色。深い青色。

ただよふ　波に揺られた状態とも、空に漂い飛んでいる状態とも解釈できる。あるいは、空に漂う時もあれば、今また海に漂っている時もあるとも考えられる。確定した解釈はない。いろいろと考えさせてイメージをふくらませたい。連体止めで「ことよ」が省略された余情表現となっている。

キー・ポイント　**白鳥**　ここは「鷗」であろう。歌集中では千葉の海岸で早春に詠んだとされている。初出は「はくてう」というルビがあったが、その後「しらとり」に変更されたため、イメージが明瞭となった。一羽か複数かという点は議論が残っている。「白鳥」と、「空の青」「海のあを」という色彩の対照に注意したい。

鑑賞

「海の声」所収。「別離」再録。全体的にわかりやすい内容だが、詳細については議論が残っている。次はその点についても触れた鑑賞となっている。

「描かれているのは、空と海の鮮やかな青を背景に、真っ白なカモメがただよう姿である。一羽か数羽か、海に浮かんでいるのか、それとも滑空しているのか。そのイメージは読者に委ねられるところであるが、一点の曇りもなく音もない大自然の中にあって、白鳥はその姿を際立たせている。そんな白鳥は哀しくないのか、と作者はうたう。「染まずただよふ」という白鳥の在り方に心打たれずにはおられなかったのである。それはなぜか。／白鳥の白は青に映える色ではあるが、さわやかな青にも、深く豊かな青にも染まっていない。一般に白は容易に周囲の色に同化したり、ほかの色が周囲になれば無へと化してしまう。（中略）しかし、白鳥の白は染まらずにただよう。純粋で傷つきやすい青春を象徴する白は、ここでは孤高の象徴となっている。」（見尾久美恵「コレクション日本歌人選38若山牧水」平二十三）

牧水が青春の純粋さや傷つきやすさを象徴する白鳥に自身の姿を重ね、青春の孤独と悲哀を歌っているのは確かだ。白鳥のくっきりとした姿を思い浮かべながら味わいたい。

幾山河越え去り行かば寂しさの終てなむ国ぞ今日も旅行く

〔大意〕　幾つかの山や河を越えて行ったならば、きっとこの寂しさがなくなる国があるのだろう。（その思いを胸に）今日も（寂しく）旅してゆくよ。

指導上の注意点

●二六九ページ・3行

問　「寂しさのはてなむ国」とはどのようなところか。

答　寂しさが果てるところ。

補　理想と現実について考えさせる。現実には寂しさから逃れられない状況にいることを確認させる。

語句の研究

●二六九ページ・3行

幾山河　旅路の長さを具体的に言ったもの。「いくつかの山、また河」という解釈もある。

越え去り　越えてゆく。「さる（去る）」は行く、経過する、の意味。

はてなむ　〈な〉は完了・確述の助動詞「ぬ」の未然形。〈む〉は推量・婉曲の助動詞「む」の連体形。

国ぞ　〈ぞ〉は係助詞。この下に「あらむ」の省略があると考えられる。〈ぞ〉を詠嘆の助詞と取る説もある。従来の文法では割り切れないニュアンスをもつ〈ぞ〉の使い方であり、創造的な口語訳も可能であろう。

キー・ポイント　**今日も旅行く**　寂しさのない場所を求めて歩み続ける作者の心情を思いやることが必要だろう。

鑑賞

「海の声」所収。「別離」再録。興に乗ると作者は朗々と自作を吟詠したというが、この一首の声調などはそれに最適であろう。

「真実に自分が生きてゐると信じてゐる人間の心には、取り去ることの出来ない寂寥が棲んでゐるものである。行けど行けど尽きない道の様に、自分の生きてゐる限りは続き続いてゐるその寂寥にうち向かつての心を詠んだものである」という自歌自註がある。

「中国を巡りて」の注記のあるこの一首は、「日向への帰郷の途次、一人で岡山から高梁川をさかのぼり、今の哲西町あたりの山を越え、広島県に入って西条に出た時の旅の感傷を歌ったもの」（藤岡武雄「短歌シリーズ・人と作品8若山牧水」昭五十六）という指摘がある。牧水の愛唱したカール＝ブッセの詩の影響も広く知られているところである。

山のあなた　―「海潮音」（上田敏訳詩集）より―

山のあなたの空遠く
「幸」住むと人のいふ。
噫、われひとと尋めゆきて、
涙さしぐみかへりきぬ。
山のあなたのなほ遠く
「幸」住むと人のいふ。

石川啄木　二首

作者

石川啄木

明治十九（一八八六）年～明治四十五（一九一二）年。歌人・詩人。岩手県南岩手郡日戸村生まれ。本名は一（はじめ）。父は常光寺の住職であったが、後に北岩手郡渋民村宝徳寺の住職となり移住し、啄木もここで成長した。渋民小学校を経て、盛岡尋常中学校に入学した。与謝野鉄幹・金田一京助ら新詩社の歌誌「明星」を愛読し、与謝野晶子の「みだれ髪」に深く感動した。自らも新詩社に加入し、創作意欲旺盛であった。明治三十五年の秋、盛岡中学を中退して上京、文学で身を立てようとしたが果たせず、翌年二月発病して失意のうちに帰郷した。このころから啄木と号した。三十八年、浪漫的な作品を収めた処女詩集「あこがれ」を刊行し、早熟の才能を示した。この年、父が宝徳寺の住職を罷免され盛岡に移った。堀合節子と結婚し、盛岡市内に住んだが、生活のため、三十九年四月から渋民村に帰って、母校渋民小学校の代用教員を務めた。欠勤の多い教員であった。そのころ小説「雲は天才である」などを執筆した。四十年、生活の苦しさを打開するために北海道に渡り、函館・札幌・小樽・釧路などを転々として約一年間の記者生活を送った。同郷の金田一京助を頼って上京、自然主義に基づく小説を書いたが認められず、苦渋に満ちた生活に密着した短歌を、ローマ字三行書きの歌集「ＮＡＫＩＷＡＲＡＩ」を出した土岐哀果にヒントを得て、三行書きという革新的な形式で発表した。四十二年、「スバル」の創刊に参加すると共に、東京朝日新聞社の校正係となり、函館から家族を呼び寄せた。四十三年には朝日歌壇の選者となり、処女歌集「一握の砂」を刊行した。その詠風は世の注目を集めた。腹膜炎を病み、生活苦と病苦のうちに、四十五年に二十六歳で他界した。没後第二歌集「悲しき玩具」が出版された。

作者を解くカギ

幸徳秋水事件後は、その浪漫的歌風の中に、実生活の経験をふまえた社会主義的傾向を加えるようになった。また、「時代閉塞の現状」（明四十三）は、鋭い文明批評として評価される。

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ

〔大意〕　命のない砂の悲しいことよ。その砂を握ると、たださらさらと空しく指の間から落ちてゆくばかりだ。

指導上の注意点

●二六九ページ・6行

問　**「さらさらと」は、どのような感じを表しているか。**

答　とらえ難く、空虚な感じ。「鑑賞」参照。

語句の研究

●二六九ページ・5行

砂　無の静かさの象徴。

キー・ポイント　**かなしさよ**　「悲しさよ」と、漢字を使用せず、なぜ平仮名で表記したのかを考えたい。まず、ひらがな表記は透明感やはかなさを表し、それが虚無感と呼応して、「いのち」とも響き合う。また、漢字が意味を限定してしまうのを避けるためでもある。悲しみは心の奥底では愛しみともつながっている。自己への愛しみを奥底に秘めた悲しみを表現したので、平仮名表記にしたと思われる。なお、助詞「よ」は、そうした「かなしさ」に対する詠嘆を表している。

鑑賞

「一握の砂」中「煙」所収。この歌集は冒頭の一首「東海の小島の磯の白浜に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる」で知られているように、砂が登場しており、根底には函館の大森浜がイメージされているといわれている。

「この一首は第三句の「さらさらと」という表現が効果的で、はかない砂に託して己が生命を哀惜する作者の虚無的な心情が歌われており、歌集「一握の砂」の書名を暗示する秀作である。」（岩城之徳「短歌シリーズ人と作品10石川啄木」昭五十五）と評されている。また、「石をもて追われるように故郷を出た啄木の孤独と寂寥が歌われており、「砂」に呼びかける形をとりながら、指からこぼれ落ちる砂のようにとらえようとしてもとらえがたく時々刻々失われていく生命を哀惜する」（今井泰子「日本近代文学大系23石川啄木」昭四十四）という鑑賞もある。

「いのちなき砂のかなしさよ」として砂を見つめる作者に命の充実は感じられず空しい思いを抱いていることは確かだ。このように一気に心情を吐露する一・二句の口語的、散文的調子がいわゆる「啄木調」と言われるもので、そのストレートさゆえに正直で飾り気のない響きを持って、読者の心に響いてくる。

ふるさとの訛なつかし
停車場の人ごみの中に
そを聴きにゆく

〔大意〕　ふるさとの訛が懐かしくて、停車場の人ごみの中に、それを聴きにゆく。乗降客の中に感じる、聞き慣れた訛は、私の心を潤し、安らかにさせてくれるのだ。

指導上の注意点

●二六九ページ・8行

問　**作者はどこにいるか。**

答　東京。作者が東京に住んでいて、この歌を作ったということをきちんと押さえさせる。有名な歌なのでわかったつもりになっていて、よく味わわない者がいるようである。

語句の研究

●二六九ページ・9行～10行

停車場　漂泊者啄木の歌には折々「汽車」や「停車場」が詠まれている。それが明治四十年前後の、北海道や東北、そして東京の雰囲気を示していることに注意したい。

そ　それ。「訛」を指す。

キー・ポイント　**ふるさとの訛なつかし**

この詩句は誰もが聞き慣れているものといえる。人々が十分に認知している詩句を利用して、次世代の寺山修司（二七一ページ・2行参照）が自身の歌を詠んだことを理解しながら、二人の歌人が表現した内容の違いを考えたい。

鑑賞

「一握の砂」第二章「煙」所収。ここには思郷の歌、往時を回想して懐かしむ歌が多い。

・病のごと／思郷のこころ湧く日なり／目にあをぞらの煙かなしも
・やまひある獣のごとき／わがこころ／ふるさとのこと聞けばおとなし
・かにかくに渋民村は恋しかり／おもひでの山／おもひでの川

岩城之徳はこれらの思郷の歌について「第一の特色はいずれも東京時代の作品で、都会の生活に疲れた彼の心に起きた切ない郷愁のひと時の詠出である。彼の思郷の歌には、ほのぼのとした感傷的な情緒が感じられるが、これは作者が現実の不安や焦燥から逃れて、追憶の世界に身をかわすことによって生み出した感傷性によるものである。第二の特色はこれらの歌の作られた上京後の啄木と、その故郷渋民村との複雑な関係を背景にして思郷の歌が詠まれているということである。」（「定本石川啄木全歌集」解説）と、故郷喪失の都市生活者としての啄木のかなしみを指摘している。東京に住む人間の多くはこうした故郷喪失者であり、この歌が愛唱されてきたのは、そうした普遍性に立ってのことである。

啄木自身は故郷に対して尋常でない相反感情を持っており、それゆえにかえって、こうした望郷歌を詠むことで、作者自身の心を潤し、安らぎを与える作用をしたのであろう。

斎藤茂吉　二首

作者

斎藤茂吉

明治十五（一八八二）年～昭和二十八（一九五三）年。歌人・医師。本名は茂吉（しげよし）。山形県南村山郡金瓶（かなかめ）村（現、上山市）に農家（守谷家）の三男として生まれる。明治二十一年、金瓶小学校に入学。（後に堀田村半郷小学校に移り、更に上山小学校に転校した。）宝泉寺の住職佐原窿応（りゅうおう）に習字を習い、その人格から感化を受けた。二十九年、上山小学校高等科卒業。八月上京し、医院を開業していた親戚の医師斎藤喜一郎（のちに紀一と改名）方に寄寓した。東京府開成尋常中学校を経て、三十五年、第一高等学校第三部に入学。幸田露伴に傾倒したり若干の作歌を行ったりしていたが、三十八年、正岡子規の「竹乃里歌」を読んで感動し、作歌を志した。七月、斎藤紀一の養子として入籍。九月東京帝国大学医科大学に入学。三十九年二月、「馬酔木」に短歌五首が初めて載る。伊藤左千夫を訪問し、長塚節・平福百穂などを知る。四十二年、初めて観潮楼歌会に出席し、森鷗外のほか多くの歌人たちを知る。四十三年、同大学を卒業。四十四年、一月より伊藤左千夫らが創刊した「アララギ」の編集を担当し、寄稿依頼・作歌・歌論に旺盛なる活動を示す。二月、医科大学副手、附属病院（東京都巣鴨病院）勤務となり、精神病学を専攻。大正二年、五月、母いく郷里にて没す。九月、「死にたまふ母」（五十九首）を「アララギ」に発表。十月、第一歌集「赤光」を刊行。万葉調の強烈な叙情と鋭い近代的感覚に満ち満ちた歌境が大きな反響を呼んだ。三年、斎藤紀一の次女てる子と結婚。この年、島木赤彦と協力し、「アララギ」の活動が活発化する。六年、長崎医専教授となる。八年、歌論集「童馬漫語」を刊行。十年、「あらたま」を刊行。十年から十三年までドイツ留学。十五年、再び「アララギ」の編集発行人となる。昭和二年より養父の青山脳病院院長を継ぐ。昭和十二年、帝国芸術院会員となる。二十年、郷里に疎開。二十二年、上京。二十四年、「白き山」を刊行。二十六年、文化勲章を受ける。二十八年二月、心臓喘息のため自宅にて七十一歳で他界した。

作者を解くカギ

「短歌は直ちに『生（いき）のあらはれ』でなければならぬ」と主張。大正九年、実相観入という、上辺だけの写生でなく自然の真実の有様を捉え、自分と自然とが一つとなった境地を写し出そう、という写生論を「アララギ」に発表する。

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり

〔大意〕　のどの赤い玄鳥のつがいが屋梁にいる。その一方で（私を生み育ててくれた）母は死んでいかれるのだ。

指導上の注意点

●二七〇ページ・2行

問　**「足乳根の母は死にたまふなり」に込められた作者の心情を説明せよ。**

答　母の死が、いよいよ現実のものになるのだという覚悟と限りない悲痛感。

補　作者の息づかいについて生徒に注意させる。「なり」と言い切ったときの心情を生徒に考えさせる。

語句の研究

●二七〇ページ・2行

のど赤き玄鳥ふたつ　玄鳥は燕の古称。「ふたつ」はつがいの二羽と考えられる。「喉元の赤い玄鳥が二羽」の意。玄鳥の喉元の羽の栗毛色を「赤」と捉えている。

キー・ポイント　**足乳根の母**　「足乳根」は母にかかる枕詞。死にゆく母に対して、若く美しい盛りの時を思わせる「足乳根の」を使って、豊かな母乳で育ててくれた母への感謝の気持ちを暗示している。死に対して生（自分の誕生時）を対置させ響かせている。普通「垂乳根」と書くところであるが、茂吉は枕詞のイメージを意識的に使ったといえる。

鑑賞

「赤光」中「死にたまふ母　其の二」所収。母の享年が五十九歳であったため、「死にたまふ母」は五十九首となっている。

母の死を目前にした一首であり、「死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞こゆる」の歌とともに、「死にたまふ母」の頂点をなす。玄鳥の喉の部分の短毛は明るい茶色をしており、黒い頭部や羽の色との対比で赤く輝くように目立つ。とくに暗い梁の近くでは目を引いて感じられたのであろう。こうした玄鳥の存在は〈生〉そのものであり、生命が生き生きと躍動している姿を〈赤〉で示したことになる。四月から七月にかけては玄鳥が卵を産み孵化を迎える時期だ。作者が母の死を見守っている時期はまさに生命が生まれ溢れようとしている季節なのだ。「死にたまふ母」には他にも様々な形で生命の誕生が歌われている。それと逆行するかのように母の命が終わることが悲しみを際立たせていよう。

茂吉の自註「作歌四十年」では、釈迦入滅の折と重ね合わせたことが述べられている。「世尊が涅槃に入る時にも有像がこぞつて歎くところがある。私の慈母が現世を去らうといふ時、のどの赤い玄鳥のつがいが来てゐたのも、何となく仏教的に感銘が深かつた」。たまたま目にした玄鳥とはいえ、作者の心象は奥深さを秘めている。

最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも（もがみがはさかしらなみ）

〔大意〕　最上川の水が白く逆波を立てるほど強い雪が吹き付ける夕暮になったことだ。

指導上の注意点

●二七〇ページ・3行

問　**「逆白波」とは、どのような波か。**

答　逆巻く白い波。「日本海からの強風にせかれて立つ波を土地では『逆波』と言う」（本林勝夫）。流れとは逆から吹く強風に白い波頭を立たせている川面の形容。土地の船頭が白逆波と言ったのを茂吉が〈逆白波〉と改造したともいわれている。

語句の研究

●二七〇ページ・3行

最上川　日本三急流の一つ。全長二二九キロメートルの大河で日本海に注ぐ。茂吉が戦中に疎開した大石田付近では流れは緩やかとなっている。なお、中村憲吉が大正十一年に詠んだ一首「夕橋の土吹きさらす風つよし大川にあがる逆さ白なみ」との関連も指摘されている。

キー・ポイント　**なりにけるかも**　〈なり〉はラ変四段の連用形。〈に〉は完了の助動詞の連用形。〈ける〉は過去・詠嘆の助動詞の連体形。〈かも〉は古語の感動・詠嘆の終止形。万葉集で最も多く使用された。茂吉は、万葉集を尊重しており、万葉調の結句を好んで使用した。

鑑賞

「白き山」中「逆白波」所収。積もった雪の中、空からはさらに雪が吹き付けてくる。その強い風によって、最上川の水も逆巻き白い波を立てながら暮れて行こうとしている。逆白波に焦点をあてることによって、厳しく人を寄せ付けない自然に対峙して、「なりにけるかも」という堂々とした万葉調で格調高く歌い上げている。また「逆白波」という一語は硬質な美しさで光を放っている。以下の鑑賞文も参考になる。

「凄絶な吹雪の最上川をワイド・スクリーンに写しとったような趣があろう。とくに下句の勁健な万葉的格調に、吹雪の中暮れてゆく大河と、それに対する感動が一気に詠み下されている。老身をひき絞るような歌調に作者本来の姿のよみがえりを見るであろう。」

（本林勝夫「新研究資料　現代の日本文学5短歌」平十二）。

この歌は、戦時中、東京から故郷山形県上山市（蔵王山近く）に疎開していた茂吉が、戦後さらに北の大石田（最上川近く）移り住んだ折の一首である。大石田疎開に当たって茂吉は芭蕉を意識し、芭蕉の句（「五月雨を集めてはやし最上川」等）に負けない歌を作って後世に残したいと語っている。まさに、最上川の歌として茂吉後期の金字塔となった作品である。なお、この時期、茂吉は戦争中に詠んだ多くの戦争賛歌（戦争を讃える歌）に対して戦争責任を問われ非難を受けていた。当該歌を詠出する背景には厳しく差し迫った現実があったことも感じ取りたい。

齋藤　史　二首

作者

齋藤　史

明治四十二（一九〇九）年～平成十四（二〇〇二）年。歌人。東京都の生まれ。父の瀏（りゅう）は職業軍人で、短歌結社「心の花」同人であった。父の移動に伴い、小学校より旧制高女時代にかけて、北海道、三重、福岡、小倉と転住した後、長野市に在住した。大正の末ごろより、「旭川歌話会誌」や「心の花」などに短歌を発表する。昭和五年、東京へ転住し、六年、結婚。前川佐美雄らと「短歌作品」を刊行する。十一年、二・二六事件にかかわり、父の瀏が刑を受ける。史の友人であった青年将校らも刑に服する。十四年、父らを中心として「短歌人」発刊。十五年、第一歌集「魚歌」刊。「歴年」刊。十八年、「朱天」刊。二十年、長野県へ疎開。二十二年、「やまぐに」刊。二十八年、「うたのゆくへ」刊。以降、「密閉部落」（昭四十一）、「風に燃す」（昭四十二）、「ひたくれなゐ」（昭五十一）などの歌集のほか、随筆集「春寒記」（昭四十九）、及び「現代短歌入門」（昭二十九）などがある。平成五年には、女性歌人初の芸術院会員に選ばれ、九年には毎年一月に皇居内で行われる歌会始で、天皇に招かれて歌を詠む召人を務めた。平成十四年四月に九十三歳で他界した。

作者を解くカギ

超現実主義的作風を初期から見せており、後年、生活や介護を詠んでも歌風は挑戦的で大胆、時代を超えて存在感を示した。

野に捨てた黒い手袋も起き上がり指指に黄な花咲かせだす

〔大意〕　野原に捨てられて地面にまぎれていた黒い手袋も、草花の成長する力に押されて起き上がり、指の周りには黄色の花を咲かせている。

指導上の注意点

●二七〇ページ・5行

問　**どのような色彩が用いられているか。また、そのイメージについて考えてみよう。**

答　黒と黄色。黒は暗く閉ざされたイメージ。黄色は明るく華やかな季節が巡ってくるようなイメージ。

補　対照的に使用されている色彩を感じ取りたい。この教科書に掲載されているほかの歌でも、色彩が印象的に使用されているものを取り上げることも有効である。

語句の研究

●二七〇ページ・5行

野に捨てた黒い手袋　野原に捨てられて放置されていた手袋。「黒い手袋」とは、何の変哲もない、むしろ暗い感じのする手袋。

起き上がり　地面に埋もれるようになっていた手袋が、草花が伸びる力によって起き上がるかのように持ち上げられている様子。

キー・ポイント　黄なはな　黄色の花。「五月」という中で歌われているが、花の種類は指定されていない。春から初夏に咲く黄色の花を自由にイメージしてよいだろう。俳句と異なり短歌の場合は同じ花を「春」の歌として詠む場合もあるし、「夏」として詠む場合もある。たとえば、北原白秋は次のように歌集「桐の花」で〈たんぽぽ〉を、春と夏の両方に跨る存在としてとらえていた。

・廃れたる園に踏み入りたんぽぽの白きを踏めば春たけにける（「夏」）

れている。これも季節の到来を詠んだ歌となっている。

・白い手紙がとどいて明日は春となるうすいがらすも磨いておこう

「野に捨てた」の歌を詠んだ翌年、史の父や友人は二・二六事件に関わったとされて罪を受けた。その後、この出来事は史の生涯のテーマとなっていく。当該歌は、それに先立つものであり、同時に、戦争の悲劇が始まる直前でもあった。「今一歩であの救ひがたい鏖殺（注、皆殺しの意）の季節に堕ちる寸前」（岡井隆「斎藤史全歌集解題」平九）の作と考えられている。

鑑賞

「魚歌」中「五月」所収。暗い季節から新しく爽やかな季節になった華やぎが歌われている。まず、誰が捨てたのか（落としたのか）もわからないような平凡で面白みのない黒い手袋を提示する。それに対して、明るく鮮やかな黄色の花が、力強く黒い手袋を持ち上げて手袋の指の周りに花を咲かせる景を示し、みずみずしく華やかで生命力に満ちた季節が巡ってきた悦びを表現している。「魚歌」は色彩感鮮やかな歌集であり、当該歌もその一つ。次に示すように「魚歌」の冒頭歌では、「白」が効果的に使用さ

水滴（すいてき）よりつめたく断（だん）を下（くだ）すものわれの背筋（せすじ）に添（そ）ひて流（なが）れつ

〔大意〕　ふいに背中に落ちてひやりとする水滴よりも、もっと冷たいものが厳しい決断を迫られた私の背筋に流れ落ちていくのだ。

指導上の注意点

●二七〇ページ・6

問　**この歌に見られる修辞技法は何か。**

答　字余り（初句）、句跨がり（つめたく断を下すもの）、句切れ（三句切れ）。

補　字余りの初句を受けてさらに句跨がりへと続けていることに注意する。定型に収まらない緊迫感や不安を強調する。

語句の研究

●二七〇ページ・6

背筋　背骨に沿ってくぼんだ部分。「背筋が寒くなる」「背筋がぞくりとする」のように、漠然と背中全体をイメージさせることも多い。

流れつ　自動詞「流る」の連用形「流れ」に完了の助動詞「つ」の終止形。緊迫した一瞬を強調する効果がある。

キー・ポイント　断を下すもの　「断を下す」は、思い切って決めること。決断。ここでは、水滴が決断を迫るかのように受けとめられている。

鑑賞

「ひたくれなゐ」中「虚空」所収。不意にぽたりと落ちてくる水滴に当たるとその冷たさに驚く。一瞬の出来事ながら、人の意識を一気に覚醒させ、緊張させる。その緊張は、さらなる「決断」を迫るものに向き合っている。時に自分を覚醒させる水滴以上に冷たく厳しいものが、背中を流れ落ちると歌われている。流れ落ちている感覚は本人しか分からず、他人には見えない。ここに作者自身の覚悟や作歌姿勢を見るべきであろう。

一見ユーモラスな連想を誘う「水滴に当たる」ことは、夜露や雨上がり、入浴中など日常でも経験する。そこから全く異なる次元の緊張を引き出すのは、作者の特性である。父も関係した二・二六事件で、小学校以来の幼なじみや友人の多くを処刑という形で失い、戦後は父の死、母の介護、夫の死と、大きな決断を迫られる局面にひとりで立ち向かわねばならなかった作者は、まさに現代社会の問題と向き合っていたと言える。

寺山修司　二首

作者

寺山修司

昭和十（一九三五）年～昭和五十八（一九八三）年。歌人・詩人・劇作家。青森県弘前市に父八郎、母はつの長男として生まれる。昭和十六年、父の出征で母と共に青森市に転居。二十年、青森大空襲を逃げのびるも、終戦後、父の戦病死を知る。父の兄寺山義人を頼って三沢市に転居。古間木小学校入学。母は三沢の米軍基地で働き、二十三年には九州の米軍基地へ出稼ぎに向かった。そのため修司は、母の叔父で青森市内の映画館兼芝居小屋経営の坂本勇三に引き取られた。二十六年、青森県立青森高校に入学。学校新聞、文芸部に参加。二十七年、青森県高校文芸部会議を組織。詩誌「魚類の薔薇」を編集発行。全国の高校生に呼びかけて十代の俳句雑誌「牧羊神」を創刊。二十八年、全国学生俳句会議を組織し、俳句大会を主催。二十九年、早稲田大学教育学部国語国文学科入学。シュペングラーの「西欧の没落」に心酔。中城ふみ子の短歌に刺激されて、「チェホフ祭」五十首を作り（原題は「父還せ」だったが、編集者で後に作家・評論家としても活躍した中井英夫がタイトルを変更）、第二回短歌研究新人賞を受賞。冬、ネフローゼを発病。長期療養となり、退学するが、この時期に詩人谷川俊太郎と知り合う。三十二年、第一作品集「われに五月を」刊行。三十三年、第一歌集「空には本」刊行。この年退院。三十六年「塚本邦雄論」執筆。三十七年、第二歌集「血と麦」刊行。放送叙事詩「恐山」を書く。三十八年、自作脚本「乾いた湖」の映画化で出会った女優・九條映子と結婚。四十年、第三歌集「田園に死す」、戯曲集「血は立ったまま眠っている」刊行。放送詩劇「犬神の女」で第一回久保田万太郎賞受賞。四十二年、横尾忠則らと「天井桟敷」（演劇実験室）を設立し、国内外で公演を重ねる。四十六年「寺山修司全歌集」刊行。そこでは自在な想像力の世界「空には本」から、情念をテーマとした「血と麦」へ、さらに土俗的な問題などを追求した「田園に死す」と詩的世界の拡大をたどることができる。五十七年、当時の新しいメディアであったホームビデオで谷川俊太郎とビデオレターの交換を始めた。五十八年、肝硬変悪化により他界。

作者を解くカギ

作者は事実や私性からの脱却や経歴を虚構化する試行を追求し、そこに社会性や普遍性を付与する作品を創作した。

ふるさとの訛りなくせし友といてモカ珈琲はかくまでにがし

〔大意〕　故郷の方言の訛りを直した友と飲むモカコーヒーの味は、こんなにも苦いことだ。

指導上の注意点

●二七一ページ・2行

問　**この歌を詠む上で参考にされていると思われる短歌をこの教科書掲載の中から指摘しよう。**

答　石川啄木の「ふるさとの訛なつかし」（二六九ページ）。「なつかし」を「なくせし」と二音だけ変えて、異なる歌境とした。

語句の研究

●二七一ページ・2行

モカ珈琲　当時としては、都会的な雰囲気を醸しだすものとして使われている。

かくまで　こんなにも。

にがし　モカ珈琲は一般的に酸味と甘みがあるとされているが、心に感ずる思いによって「にがし」と感じられた。故郷の訛りをなくした友人に対して魂が響き合わなくなった違和感や疎外感が表出されている。

キー・ポイント　**ふるさとの訛りなくせし友**　修司は青森県弘前市の出身であり、生涯青森訛りを直さなかった。訛りは修司の故郷の魂だったといってよい。友人はそれをなくして東京弁で喋っているのである。これは故郷を喪失した人の行為である。修司と同じように故郷の訛りに心を寄せた啄木の歌を利用しながら、啄木とは異なる視点から故郷に対する思いを歌ったのだった。近代短歌の場合、本歌取りという表現はされないが、それに近い手法とみられる。啄木歌を踏襲して、啄木の歌に匹敵する出来ばえとなった。

鑑賞

「空には本」中「燃ゆる頬・森番」所収。目の前にいる友が上京後早々に訛りを直し、標準語を話すようになっていることが詠まれている。故郷の訛りにこだわっている作者には、そこに違和感があり苦々しく思われたのであろう。一緒に飲んでいるモカコーヒーの味までもひどく苦く感じられるのである。

一見すると、故郷の言葉を捨てた友人への齟齬を表現した歌と見られるが、それは同時に、故郷を出て東京で生きようとする自身の姿にも重なってくる。モカ珈琲は東京の象徴であり、その苦さは故郷とは異なる東京、そして、その東京で生きようとする自身に対する苦さでもあったのだ。啄木は故郷の訛を聴くことで安らぎを得ようとしているが、修司の作では、故郷を捨て去る友の姿が東京への疎外感をつのらせている。修司が大学入試で上京した折の作とされている。

マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや

〔**大意**〕（煙草に火をつけるために）マッチを擦る少しの間に見えた周りの海には霧が深い。自分はさっきから思い続けている。「一体命を捨てるほどの祖国があるのだろうか？」と。

指導上の注意点

●二七一ページ・3行

問 **この一首に陰影をもたらしている一語は何か。**

補 **答** 「霧」。

この「霧」が、下の句の根源的な問いを導き出すのにふさわしい役割を果たしている。下の句で提起した永遠の問いも、また深い霧に包まれて存在し続けるのである。

語句の研究

●二七一ページ・3行

マッチ擦るつかのま　煙草に火をつけるためにマッチを擦り、火がついているわずかな間。くわえ煙草をして沈思している青年の姿が髣髴とする。このころ作者の表記は現代仮名遣いであった。第二歌集「血と麦」から旧仮名遣いを用いている。

海に霧ふかし　微妙な陰影を醸し出すことに成功している表現である。海浜で見通しのきかない霧の中にともしたマッチの火で、より霧の濃さを感じた瞬間の描写と見たい。海上と見る説もある。その場合は船上の甲板からの眺めということになる。三句切れ。

身捨つるほどの祖国はありや　不惜身命の思想に対する問い。旧帝国日本あるいは革命中国などの想念にとらわれた過去への問いでもある。

キー・ポイント　**祖国**　自分の生まれた国。ここでは戦前の軍国日本のイメージ。（しかし、普遍性を持つ解も考えられる。）

鑑賞

第一歌集「空には本」所収。「祖国喪失」と題された一連二十四首中の第一首目の歌。この「祖国喪失」には、その冒頭に、「七月の蠅よりもおびただしく燃えてゆく破片。『中国！』と峯は気恥かしい片想ひで立ちすくんでいた。武田泰淳」という詞書きが添えられている。

発表当時より話題になった作品で、作者の代表作と言ってよいだろう。吉本隆明も、「言語にとって美とはなにか」で取り上げて論じている。海辺で煙草にマッチを擦って火をつける束の間に見えた周辺の海には濃い霧が深く立ちこめている。自分は先刻から心の底に思っている。「一体身命を捨てるほどの価値のある祖国などというものが存在するのだろうか？」と。霧に包まれてくわえ煙草に火をつける男の姿が何とも格好がよく陰影に富む感じがするところに、下の句の深い問い（国家というものへの、また人間存在というものへの）が重なり合って印象深い一首になっている。海に向かっているところから、時代的にも海軍や特攻隊への連想も働き、また作者の父も戦病死をとげていることもあわせ

て考えたい。そのように祖国に忠誠を尽くして身命を捨てた人たち。それに対するアンチ・テーゼの問いも作者は投げ掛けているのである。その一方で、後に作者自身が「黄金時代」という作品の中でこの歌を使っている。横浜の海を中国の友人と見に行った時のこととして「その夜は、霧がふかくていつまでも黙って『べつべつの海』を見ていた」あとに、この歌を記している。作者らしい再利用ではあるが、「海」の捉え方には、さらなる広がりも示していると言えよう。昭和三十年代の歌壇では、「政治と文学」のテーマが追求され、続いて「思想と文学」という問いがなされるようになっていったが、その反映でもあるだろう。なおこの一首は富沢赤黄男の一句、「一本のマッチをすれば湖は霧」が下敷きにある。作者は他にも、俳句・小説・映画など先行作品から養分を汲み取って自分なりに加工して短歌へと変換していく。この手法は、脚本や舞台演出、映画などにも生かされ、そこからまた短歌や詩へ再生する「場」を作り出した。

春日井建　二首

作者

春日井建

昭和十三（一九三八）年〜平成十六（二〇〇四）年。歌人。愛知県の生まれ。父の濱（こう）が中部短歌会を主宰しており、建も昭和三十年ころより「短歌」に作品を発表する。三十四年、文芸同人誌「旗手」に参加。三十三年「短歌」による戦後歌人のアンソロジー「新唱十人」に参加。三十五年、塚本邦雄・岡井隆・寺山修司らと同人誌「極」を創刊。また、十九歳までの短歌を集めて歌集「未青年」を刊行。「われわれは一人の若い定家を持った」と三島由紀夫に激賞され、大きな反響となった。四十五年、全歌集「行け帰ることなく」刊行。四十九年、初期作品集「夢の法則」刊行。一時歌作を休止していたが、五十年代より再び歌作を開始、父の死をうけて五十四年より「短歌」を編集した。愛知女子短期大学教授、中日文化センター講師などを勤めた。平成十六年、中咽頭癌のため、他界。

作者を解くカギ

多彩なテーマと鮮やかな比喩的表現の世界で現代短歌の美的存在感を広く認めさせた。

太陽が欲しくて父を怒らせし日よりむなしきものばかり恋ふ

〔大意〕「太陽が欲しい」とねだって、父を怒らせた日からずっと（私は）願っても手に入らないものばかりを恋しく思うのだ。

指導上の注意点

●二七一ページ・5行

問 **父が怒った理由として考えられるものを説明せよ。**

答 太陽は人が手に取れるものではない、小さく見えても、見える大きさと本当の大きさは違う、説明しても納得しないから、など。

補 子供の感覚で願う事と、大人の理屈とのずれを理解させる。各自の経験や意見を引き出して、鑑賞に生かす。

語句の研究

●二七一ページ・5行

太陽が欲しくて　幼児の無邪気な願い、口にして困らせようとする甘えから出たこと、などと解釈の幅はある。さまざまな可能性をあげることで、自分に引きつけた読みができることを示唆する。

キー・ポイント　**むなしきものばかり**　この歌では「太陽」もむなしいもののひとつになっている。父が怒るように太陽を欲しがる行為こそ「むなしい」。ここでは作者が、幼いときに既に自身の資質に気づいたことを示している。

鑑賞

「未青年」所収。作者が十九歳の時の作品で、雑誌「短歌」に「未青年」五十首として掲載された。寺山修司・中城ふみ子に続いて、中井英夫（編集者・評論家・作家）が発掘した新人であったが、これを三島由紀夫が注目し、独特の主題と資質を高く評価した。そのため、歌壇以外からも注目されることとなった。掲出歌はその中の一首で、作者が自身の資質を認め、近代短歌が育てた写生や象徴技法にとらわれず、形式と言葉による表現を目指している。当時の歌壇の主流は生活詠と心境をテーマとした内面描写であり、虚構性や物語性の強いものを遊戯的・実験的として傍流に見る場合があった。それを知る環境に育ったにもかかわらず、作者は自己の感覚表現に形式を活用する。

父と私の幼い日の情景から現在の「私」のありように繋ぐが、「むなしきものばかり恋ふ」と断言する。「太陽が欲しい」という願いが「むなしい」ことは理解できる青年となっても、まだ怒った父の心境にはなれない。しかし、幼き日の「むなしい」願いを抱き続けているのではなく、「むなしきものばかり恋ふ」ようになっている。「恋」は憧れてやまないものに対する情熱であり、理詰めで消えるものではない。父でさえこの想いを理解しないのだから、このままひとりこの想いを秘めたまま生きていくのだろうという諦めも潜んでいるのである。

作者自身も「句またぎを入れた「太陽が」の歌は、過去から現在までの気質の連続性を形式として表している。「むなしきもの」とは、地上的な価値のないものである。」（「地上性を越えるもの」）と書いている。

母にはじまり無限の人を並べたる不滅の列にわたしはをらず

〔大意〕　母を初めとして（先祖を）辿っていくと、その無限にも思えるぐらいの人が並ぶ、その途切れるとも思えない列の中に私はいないのだ。

指導上の注意点

●二七一ページ・6行

問　**「無限の人」とは何を指しているか。**

答　先祖・家系。

補　実際に何代前まで名前が分かるかを書き出したり、記号を使って倍々に増えるのを見せても良い。

語句の研究

●二七一ページ・6行

無限の人　母から遡る形での先祖、祖先のひとりひとり。実際に遡ろうとしても面識ある世代はすぐに終わってしまう。血縁関係でも面識のない、個を特定できない「人」のつらなりとなる。次の「不滅の列」と対句的な効果を上げている。

不滅の列　遡った祖先につながる人もさらに「母から」はじめると途切れなく続く命の連続が見える。それは現在まで滅することなく続いてきた事の証明でもある。

キー・ポイント　**わたしはをらず**　現代仮名遣いでは「おらず」。母から始めているので、当然自分は含まれない。しかし「子」を持たなければ、この不滅の列には並べないことも暗示している。

鑑賞

「未青年」所収。父母や祖父母など三世代ぐらいの認識はあっても、直接面識のない世代までも意識した瞬間、その圧倒的な数に驚く。そんな驚きや気づきを短歌のテーマとしたことが新鮮な感覚であり、従来は避けられてきた「無限」や「不滅」という観念的な言葉を軸としたことも作者の新しさである。他に言いかえがきかない表現を発見し、歌の中心に据えることはどの時代の歌人も目指すところである。この歌の「無限の人」「不滅の列」はまさにその動かしがたく、言いかえのない言葉である。その無数の人の繋がり、網目の中に生まれた事実を前にしてなお「わたしはをらず」と言い切る。そして、「わたし」は不滅と無限を断ち切ることも、また受け継ぐこともできる立場にある。ここには思考と感覚で作り出した意味があるばかりで、現実の描写や情景は存在しない。近代短歌がいったんは否定した空想や観念を軸とする表現を、現代短歌は前衛の技法として取り戻したのである。

俵　万智　二首

作者

俵　万智

昭和三十七（一九六二）年、大阪府門真市に生まれる。五十六年、早稲田大学文学部日本文学科入学。在学中に、歌人佐佐木幸綱に出会って歌作をはじめ、「心の花」に入会。六十年、神奈川県立橋本高校教諭となる。六十一年「八月の朝」一五〇首で第三十二回角川短歌賞受賞、翌六十二年刊行の「サラダ記念日」により第三十二回現代歌人協会賞を受賞した。平成元年、橋本高校を退職、文筆に専念する。

第一歌集「サラダ記念日」は、作者が二十歳から二十四歳までの歌を所収しており、「新人類歌集」と銘打たれている。会話を取り込んだ口語定型で句切れ、句跨りを使いながらも、字余り字足らずがなく、読者に定型の快感を味わわせる。

また、当時の新商品や店名を盛り込む現在性、さらに視点に飾り気のない庶民性があって親しみやすく、多くは失恋の歌ながら、暗く深刻ではなく、カラッとして明るいのが先行の歌にない新しさである。そのうえで、今まで見過ごされてきた感性が示されており、短歌になじみのない若い世代の読者をも強く惹きつけて、かつてないブームを呼んだ。短歌の口語化運動はそれ以前もあったが、俵の口語定型は会話を取り入れ、時代の雰囲気をつかんだところに特長があり、短歌界において画期的な出来事だった。

商業的にも歌集として空前のミリオンセラーを記録した。さらに、何気ない日常の些事を定型に読み込む親しみやすさが、誰にでも歌が作れるという気分にさせて老若男女を問わず作歌に向かわせ「〇〇記念日」のようなパロディまで登場し大衆化をもたらした。

歌集には、「サラダ記念日」のほか、「かぜのてのひら」（平三）、「チョコレート革命」（平九）、「プーさんの鼻」（平十八、第十一回若山牧水賞受賞）などがある。エッセイ集も多く「りんごの涙」（平元）、「よつ場のエッセイ」（平四）、「百人一酒」（平十八）などがある。

作者を解くカギ

「サラダ記念日」では、若い女性の恋心が歌われているが、「チョコレート革命」では、妻子ある男性との恋を歌い、大人となった作者が打ち出された。平成十五年男児を出産しシングルマザーとして子育てを行う。現在は宮崎市で暮らしている。このように変化する環境の中で新しい境地が模索されている。エッセイや評論・歌論も多く、古典の口語訳では作者の現代的感性を生かした新生面を拓いている。

生徒用の参考文献として、吉本隆明が「サラダ記念日」について語った文章を後に掲載した。俵万智の日常性や平易さについて言及したものである。

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

〔大意〕私が作ったサラダに「この味がいいね」と好きなあなたが言ってくれたので、七月六日は、サラダ記念日という特別な日になった。

指導上の注意点

●二七一ページ・8行

問 短歌の中に「　」を使用することには、どのような効果があるか。

答 日常的な会話の実感が、違和感なく読者に届く。

語句の研究

●二七一ページ・8行

この味　君（恋人）のために作ったサラダの味。

キー・ポイント　**七月六日**　特別な行事などが催されない平凡な日。

鑑賞

「サラダ記念日」中「サラダ記念日」所収。歌集の標題として取られた歌で、「サラダ記念日」は流行語ともなった。七月六日は、七月七日（七夕）の一日前の日であり、これと言って特別な日には当たらない。そんな日に、好きな「君」が、自分の作ったサラダを「この味がいいね」と言ってくれた。その喜びを「サラダ記念日」という特別な日として心に刻んでおこうというもの。自然な表現の中に、「君」の言葉に心をときめかせ悦びを満喫する恋心が歌われている。鑑賞する読者にも、自分だけが心を寄せる特別の日があるだろう。誰にも共感され抵抗なく理解される心情である。

ふとした言葉を発見して、それを二人だけにわかる〈記念日〉にするという日常の瞬間をさらりと描いている。日常会話をそのまま絞り込み、聞いたままを理解できるという点と、バリエーションを作りやすいキャッチーさが突出して広まった。特別な経験やサプライズ体験など、今までは単に思い出と称していたことを〈記念日〉と言いかえるようにもなった。学校や会社などで〈記念日〉を作るのがブームになったこともある。それまでは公的な裏付けが必要だった記念日という言葉を個人の日常に使って新鮮だったが、「手垢のついた」ことで本来の機知やユーモアを見逃さないようにしたい。

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ

〔大意〕 私が「寒いね」と話しかけると、「寒いね」と答えて共感してくれる人がいることは心を温かくしてくれることだ。

指導上の注意点

●二七一ページ・9行

問 **短歌の中に「　」を使用することには、どのような効果があるか。**

答 日常的な会話の実感が、違和感なく読者に届く。

補 前掲の「この味がいいね」の歌と同じく、「」を使っていることに留意して読ませたい。

語句の研究

●二七一ページ・9

話しかければ　「ば」は接続詞。きっかけを表す。自分が話しかけたことがきっかけとなって、相手の言葉が発せられたことがわかる。

キー・ポイント　**「寒いね」**　「寒いね」という言葉が相手に受け取られ、繰り返されていることによって、互いの共感が読み取れる。

鑑賞

「サラダ記念日」中「八月の朝」所収。自分が「寒いね」と言ったことに共感して「寒いね」と返してくれたる人がいるということに、心の温かさを感じているもので、実際の寒さも和らぐような情感である。会話体を使って表現することで場面が浮かび上がり、一層わかりやすくなっている。このような日常的な表現方法は、今まで埋没していた日常的な心情（誰でも知っているはずなのだけれども、歌としては表現されていなかった心情）の発見とともに、現代短歌における画期となって、多くの歌人たちに影響を与えた。

ところで、今日、発せられた言葉に対する「うなずき」と「くりかえし」は相手に対する共感を示すのに最も重要なコミュニケーションの手法だと考えられている。作者は、そのようなことが提唱される前から、感性によってそれを受け止めて表現していたと言えるだろう。このような目の付けどころが日常の発見へとつながり、作者の特色となっている。